

科学館でこんなことがありました

最近、はやぶさの映画が3本公開されました。20世紀フォックスの「はやぶさ/HAYABUSA」、東映の「はやぶさ 遙かなる帰還」、松竹の「おかえり、はやぶさ」です。

科学館では、東映の撮影に使われた実物大模型の展示をアトリウムで1月に行っていましたが、この映画公開に合わせ、土・日曜日、祝日には、全天周映像「HAYABUSA-BACK TO THE EARTH-」(帰還バージョン)の上映を行いました。そして、2月中旬には、まさにはやぶさウィークと呼べる週がありました。

2月15日(水)の午後からは、中之島科学研究所 第26回コロキウムで飯山学芸員が「はやぶさ帰還カプセルのカラー動画撮影」の講義を行ないました。ついで2月18日(土)スペシャルナイト「イトカワ着陸×地球帰還」を開催しました。「HAYABUSA」の観覧後、本田隆行さんと飯山学芸員のトークショーを行いました。本田さんは、大学院生時代に「はやぶさ」のイトカワ着陸の解析をされていたのだそうです。本田さんからは、プロジェクトマネージャの川口淳一郎さんとのマル秘エピソードを伺いました。飯山学芸員は、オーストラリアで「はやぶさ」の地球帰還を撮影した話を紹介しました。途中、初の試みとして、プラネタリウムホールに帰還の日の夜空を再現し、撮影した映像を使って、「はやぶさ」と「カプセル」が西から東へと星々の間を流れていく様子を映しだし、客席からは『おお!』という声があがっていました。

3月からは、展示場でサイエンスショー「虹のひみつ」が始まりました。回折格子



広 告



と呼ばれる透明フィルムを通して電球や蛍光灯を見ると、虹が見えます。この虹のことをスペクトルと言いますが、よく観察すると電球と蛍光灯ではスペクトルが違うことが分かります。

電球では赤から黄、緑、青とだんだんと色が変化して紫に至るのですが、蛍光灯では飛び飛びになっています。水銀や水素、ヘリウムなどが閉じ込められた電極付きガラス管を放電させて光らせると、やはり蛍光灯のような飛び飛びのスペクトルが現れます。しかし、ガスによって、ひとつひとつパターンが異なるようです。詳しくは、サイエンスショーをご覧いただくとして、ここでは、放電からはそのガスに固有のスペクトルが得られることに注意してください。

空に輝く星、自らが光る恒星もいろんな個性があることが知られています。赤い星や、青白い星があることは夜空を眺めれば気づくことですが、星からの光をスペクトルに分解し調べれば、その星にどんな元素が含まれているか、磁場の様子はどうなのか、どんな運動をしているのか、星の一生のどの段階なのかなど、いろんなことが分かります。

そんな研究を発表する、第17回天体スペクトル研究会が3月3日(土)と4日(日)の2日間に渡って科学館研修室で開催されました。実行委員長の加藤賢一館長の挨拶の始まり、20の講演と5つのポスター発表がありました。科学館からは、加藤館長が「こと座β星主星の分光学」、渡部学芸員が「大阪市立科学館の研究と普及活動」、長谷川学芸員が「回折格子を用いた普及事業の実施報告」、また、中之島研究所から片平順一研究員が「プレオネBe期のHeI光球線等価幅の測定」などの講演発表がありました。



広 告